スティグマとしての鼻　――芥川龍之介「鼻」論――

木村　功

周知のように「鼻」（第四次『新思潮』、一九一六年二月）は、「今昔物語集」巻二八第二〇話「池尾禅珍内供鼻語」、「宇治拾遺物語」巻二―七「鼻長僧事」を素材に、ゴーゴリの「鼻」やアイルランドの戯曲家シング「聖者の泉」の摂取の下に創作された。「鼻」は概ね、五六寸に及ぶ長い鼻を持つ禅智内供の、〈この鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだ〉ことをめぐる物語と捉えられているが、本論では内供をめぐる問題系として、従来検討が重ねられてきた自尊心という対他的問題に加え、長大な鼻という異物に領有された自己という対自的問題、さらには池の尾の僧俗の対内供的問題という三つの視点を設けて考察していく。

一

「鼻」の主人公禅智内供の抱える問題は、以下のように物語られる。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から内道場供奉の職に陞（のぼ）つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは専念に当来の浄土を渇仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧、自分で鼻を気にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。

〈始終この鼻を苦に病んできた〉にもかかわらず、〈勿論表面では、今でもさほど気にならないやうな顔をしてすましてゐる。〉のは、〈自分で鼻を気にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたから〉だという内供の心情を根拠に、内供の問題を鼻―自尊心と読む論は多い。例えば〈作者が〈自尊心〉と言っているように、精神的な問題の象徴として描かれているのである。それは他でもなく、あの「羅生門」の主人公が獲得した、自己中心主義に連なるものであり、肥大化した自意識の象徴として内供の顔の真ん中にあるのである。〉（注1）と述べる海老井英次のような解釈である。一方秋山公男は、〈それが、肉体的条件に発するものであれ、精神的な能力に関わるものであれ、自己が他者に優越すると意識するとき「自尊心」は満たされ、逆に他者に劣ると意識せざるをえない場合には、「傷」をうける。極言すれば、「自尊心」は対他性のなかにしか存在しえない。〉（注2）と指摘して、自尊心が他者との関係において発生するものであるという立場から、内供と他者との関係に注意を促している。内供が鼻そのものに苦しんでいるというよりも、自尊心が傷つけられて苦しむのは必ず他者との関係においてであること、すなわち対他的問題がクローズ・アップされていることを、ここでは確認しておきたい。そしてこの自尊心と他者の関係こそ、〈極ク痒カリケル事無限シ〉（注3）を理由に何度も鼻の脹れを治療する原話の内供との相違であり、芥川が意匠を凝らした点であることは改めていうまでもないだろう。

そもそも長大な鼻が先天的なものである以上、そのことは内供が責任を負える問題ではない。しかし「普通」の鼻をもつ人々から見て、内供の鼻が「普通」と異なり長大であるという特徴をもつことが、内供にスティグマを付与することになる。アーヴィン・ゴッフマンは、スティグマについて以下のように定義している。

未知の人が、我々の面前にいる間に、彼に適合的と思われるカテゴリー所属の他の人びとと異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性――極端な場合はまったく悪人であるとか、危険な人物であるとか、無能であるとかいう――をもっていることが立証されることもあり得る。このような場合彼はわれわれの心のなかで健全で正常な人から汚れた卑小な人に貶められる。この種の属性がスティグマなのである。ことに人の信頼／面目を失わせる（discredit）働きが非常に広汎にわたるときに、この種の属性はスティグマなのである。この属性はまた欠点／瑕疵、短所、ハンディキャップともよばれる。（注4）

さらにゴッフマンはこのスティグマを、〈第一に、肉体のもつさまざまの醜悪さ――つまりもろもろの肉体上の奇形がある。第二に個人の性格上のさまざまの欠点があり、それらは意志薄弱、過度の、あるいは異常な情欲、頼りにならぬ信念、かたくなすぎる信念、不正直などとして人びとに知覚され〉、〈第三に、人種、民族、宗教などという集団に帰属（トライバル）されるスティグマがある。それらのスティグマは家系を通して伝えられるものであり、家族の全員を一様に汚染するものである。〉（注5）と、三つに分類する。内供のスティグマが、〈肉体上の奇形〉に原因するスティグマであることはいうまでもない。ここで尊崇の対象で

あるべき高徳の僧が、同時に長大な鼻という肉体上のスティグマを持つ存在でもあることから、池の尾の僧俗において内供を対象とする敬意と貶下の混在する意識レベルが立ち上がってくる。もちろん、内供は表面的には尊敬されるべき対象として遇されているのだろうが、その一方で語り手が紹介するように内供とその鼻をめぐる噂が僧俗間において流布している事実は、崇敬の念を向けるべき対象にスティグマが備わっている事態をめぐって、単純に内供を崇敬するわけには行かない感情が存在していることを明らかに物語っている。したがって内供は自分にスティグマが備わっている以上、その問題を表面化しないために表向きはこの鼻をなんとも思わないような態度を持しつづけることが必要となる。〈専念に当来の浄土を渇仰すべき僧侶の身〉という社会的な立場と内道場供奉という僧位にある以上、内供の鼻に対する態度は、いうなれば内供の高徳の僧という社会的立場の試金石としての一面を持つことになるだろう。内供が自分の威信や自尊心を守ろうとする理由は、こうして理解できる。

そして池の尾の僧俗の側にも、内供の鼻を何事でもないように遇し続ける態度が要求される。先行研究によって指摘されているように、内供のスティグマ—鼻をめぐっては池の尾の僧俗たちの間に、あるコンセンサスがあったようなのだ。すなわち、〈内供の悩みを周囲の人々は知っていたし、内供もまた、知ってほしかったという事実である。ただ内供が鼻を気にしていたことは、あくまでも〈暗黙の了解事項〉でなければならなかった。〉、〈すなわち、こうした〈暗黙の了解事項〉に基づいて、相互に〈偽装〉を演じ合うことで、〈共犯関係〉を築きあげ、親和的な相互コミュニケーションを可能にした〉（注６）という小澤次郎の指摘や、〈ただ彼らの間で、内供が「不幸」な人であるという認識があったがゆえに、「つけつけと」笑うことは控えるなどの同情のコンセンサスが自然に発生していたのである。〉（注７）という田村修一の指摘などに認められるように、池の尾では内供に対する僧俗なりの配慮があったことが認められるのである。

このように物語の初頭で提示される内供の鼻の問題は、内供に肉体上のスティグマを与え、他者との関係を介して内供の自尊心を肥大させるばかりでなく、内供と池の尾の僧俗との人間関係にも影響を及ぼす意味で、実は社会化された問題でもあったということができる。一個の鼻がスティグマという社会的に規定された差別の知の力によって、内供という人間存在を支配するばかりか、内供と池の尾の僧俗との関係をも規定するような支配力をもつことが明らかになっているのである。

研究史を踏まえて内供の鼻をめぐる二つの問題を整理したが、ここで別途新しく検討してみたいのは、長大な鼻を持つ内供の自分自身に対する対自的な問題についてである。先にも述べたように内供の自尊心は他者との関係において生じたものであるが、そのような内供の意識はもともと内供の身体—鼻に規定されたものといえるだろう。この意味で内供の自尊心とは、内供の身体—鼻と他者との関係の関数なのである。それでは内供自身の、自分の身体に対するイメージとはどのようなものであったのだろうか。

内供が自分の鼻を、他人の前では表面上なんでもないようにふるまっていても、五六寸もあるという長大な鼻の際立った特異性は、他人はどうであれ自分自身はごまかせない。なぜなら鼻の長大さは食事の度ごとに介添えを必要とすることから、内供に日常的な不便さを意識させてその特異性を意識させることになるし、周辺の僧たちの存在も常住鏡のように機能して、内供自身に鼻の特異性を意識させることになるからである。池の尾の僧俗の中で生活する内供にとって、その意識が鼻へ集中する事態を免れるのは到底不可能である。

こうして日常に関わる内供の意識世界が鼻という身体を中心に構成されることで、内供の自己意識は鼻—身体に規定されることになる（注８）。この事態は、内供の身体イメージも鼻を中心に構成されることを意味しており、同時にそれは〈絶えず人の鼻を気にしていた〉と、内供の価値観を鼻に中心化して、内供と他者との関係性も規定していく。他者と相対して、相手の鼻ばかりをみているようなコミュニケーションというのは、常識的に考えてあまりにも奇異であるといえよう。このように内供の世界像は、身体に中心化された鼻によって、一元的に支配されてしまっているのである。

内供の自己意識と身体イメージを規定し、他者との関係においては自尊心を発動させるような、内供を領有する鼻とはどのような意味を持つものであろうか。清水孝純は、内供の鼻が〈「ぶらりと」「ぶら下がってゐる」という付加が、きわめて意識的なものであること〉を指摘している。

つまり芥川にとって、内供の鼻は、ぶらりとぶらさがっていることが重要であった。腸詰のようにと形容されていることともに、滑稽化が強調されているといえるのだが、その滑稽化は、鼻自体が腸詰のごとき異物でありながら、それ自身まるで意志あるかのように感じさせるところから来るものと思われる。

そして、〈いうまでもなく鼻に意志があるはずはない。にもかかわらず、それを一個の独立した生きもののように見たてる内供の偏執の愚かさが、滑稽さを生じるのである〉、〈鼻をあたかも独立した、一箇の生命ある物体のように見な

す視点の所在が芥川にはある〉（注９）と述べている。この重要な指摘を参照すると、内供にとっての鼻とは自分の身体を構成する一部でありながら、自分にとっての異物であり、自分であるにもかかわらずそれと認めたくないもの、いわば自分であって自分でないという自己分裂の状態を発生させるものであった。このような内供／鼻という分裂状態は、我われが我われの身体を所有していると考えていることに備わるある逆説的な状態を具現化している。鷲田清一は所有について、以下のように述べる。

所有はその主体が何かある対象を自己の存在にとって不可欠のものとして要請しているかぎりで、言いかえると、その所有物が自己の存在の一部をなしているかぎりで、その所有対象に囚われている＝占められている（etre occupe de soi）。所有者が所有対象によって所有されるという事態が発生するのである。所有とはふつう、あるものを自分の意のままにしうること（随意性）と考えられているが、所有とはむしろ自分の意のままにならないこと（不随意性）をこそ意味するのだ。（注10）

鷲田によれば、我われは自身の身体を所有しコントロールが可能であるかのように思い込んでいるが、そこには同時に「私」が身体に所有されていることでもあるという認識が往々にして欠落している。内供における鼻の問題は、我われが身体を所有しているだけではなく、身体にも（不随意に）所有され規定されているという事実をまさに象徴する事例なのである。所有されている事態は、その不随意性が顕在化する事態によってより明確化するだろう。そのことによって、身体が自己意識の基部を形成しながら、一方では自己意識にとって異質なものでもありうることが明らかになり、自分が自分であることへの違和感が前景化される。身体―鼻によってもたらされる、自分が自分であることの違和感に苦しむ内供像を通して、自己意識と身体の関係をめぐる問題が提示されているわけである。

さらにいえば、現代社会において我われは自己の身体に見出したアンバランスを、自分が理想とするイメージにしたがってボディ・メイキングするのを自然なことのように考えるようになっている。それは人間が外部にある自然環境を変革し、人間社会を構築していったことと同質の行為であり、脳内にあるイメージを外在化していくことで、自己の外部―身体という自然をイメージに適合させていく発想なのである。こうして現代人はダイエットから美容整形といった様々な方法を用いて理想的な自己の身体像を獲得するという欲望を抱くことになる。このような、自分が自分であることに違和感を抱いたり、自分の身体に認められた違和を理想的な形へと改変を加えたりして再構成する行為は、内供が自分の鼻を小さくして人並みの鼻を所有しようとすることと同じであると見なすことができる。内供が先天的に不随意の鼻をコントロールして、随意なものとして所有しようとすることは、上述したような現代的欲望に貫かれているのである。この意味で「鼻」は、自分であって自分でないものを、理想の自己―身体イメージにアイデンティフィケートしていく現代的欲望と、それに基づいた身体観を反映したテクストと読むことができる。

二

自己の身体イメージに基づいて鼻を改変するために行った物理的な治療が終わって、鏡を覗いた内供の前に現れるのは、〈殆嘘のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保つてゐる〉鼻である。

かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた。

内供が自身の理想的な鼻―新しい顔を手に入れた場面である。しばしば分析の対象にされる箇所でもあるが、海老井英次は、〈〈鼻〉に象徴される肥大した〈自我〉意識を有しながら、他者の眼を気にして、他者との係わりにおける自己確認のみを意識して、自らの姿や生き様を他人によって見られている自己に合わせることに終始して、かえって真の〈自我〉を喪失してしまった内供の態様が、この実像と虚像との奇妙な〈逆転〉関係を描いた一文を通して看取出来るであろう。〉とし、〈社会的な自己の適応性を追求する余りに、自己そのものの喪失を招いたものの悲喜劇とでもいえる事態〉（注11）を読み取る。同様に清水孝純も〈内供にとって、短くなった鼻こそが、彼にとってのアイデンティティの実現にほかならない〉、〈しかし、鏡のなかの世界にこそ実体をみる、これは一種狂気に近い世界、これこそグロテスクなものの完成なのである。〉として、〈実像と虚像の逆転の持つグロテスク感覚に目をむけ〉（注12）ている。

海老井・清水論文がそれぞれ指摘するように、〈鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見〉るというくだりは、内供の対他的に存立している〈逆転〉した意識の在り方を表現している。しかし前述したように、現代にあって他人像や理想像に自己をアイデンティフィケートする行為はもはや当然視されるものであり、倒錯としての意味を喪失してしまっている。むしろこの場面で問題とするべきは、指摘されるような実像と虚像の〈逆転〉よりも、内供の新

しい顔を内供の顔として認知しているのが池の尾の僧俗という外部ではなく、内供その人自身であるという点である。鷲田清一が顔の外部性に言及した一文を参照する。

わたしは自分の顔から遠く隔てられている。あるいはそこへといたる直接的な通路を欠いている。言いかえると、わたしは自分の顔に、(自分でも気づかない)その微妙な変化に、他人の顔をまなざすことによって、間接にしか近づくことができない。わたしがそれであるところのものに他者を経由してしか近づけないということ、このことは〈わたし〉というものがけっして閉じた存在ではないこと、〈わたし〉というものが穴やすきまだらけのイメージのようなものとしてしか存在しえないことを示している。顔の存在は、〈わたし〉を包む被膜であるどころか、逆に〈わたし〉の存在を深く走る亀裂そのものであると言ってよい。あるいは、それに関しては〈わたし〉の所有権がはじめから剥奪されているという意味で、顔は文字どおり〈わたし〉の外部であると言うこともできるだろう。(注13)

〈わたし—他者〉という機制を経ずして、〈わたし〉の顔は〈わたし〉のものとはならないという指摘は重要である。〈わたし〉とは閉じた存在ではなく、〈わたし〉というフラジャイルなイメージの措定のためには他者の介在が要件となる。この意味で、そもそも内供の顔—鼻とは、まず他者にひらかれた外部なのであり、内供自身が単独で所有できるようなものではなかったといえよう。内供の新しい顔—短い鼻も、また同様である。しかし、他者との関係に組み込まれ他者を経由して認識されるべきはずの〈わたし〉の顔とイメージは、内供においては常に自己意識に回収されてしまい、内供像は他者との間で結ばれることがない。それは、自己意識と自己像との間で行われる自閉的コミュニケーションを意味している。このことによって、内供の自己像である新しい顔—短い鼻と、他者が抱いている従前の内供像との乖離という事態が出来することになる。

この対他的関係において認められる内供のコミュニケーションのあり方を通して、内供が池の尾の僧俗との間で人間関係を構築できないというコミュニケーションの問題が浮かび上がってくるのである。そのことは、草稿と比較してみると一層明確になる。

とうとうお前の鼻も人なみになつた　もう誰もお前を哂ふ者はない　哂へば哂ふ者の方が悪いのである——鏡の中にある内供の顔は鏡の外にある内供の顔を見えて(ママ)　かう云つてゐるやうに思はれた　しかし鏡に映つてゐたのは　内供の顔ばかりではない　人の好い弟子の僧の眉のうすい顔も映つてゐた　その顔が内供には　かう云つてゐるやうに思はれたのである——とうとうお前の鼻も人なみになつた。もう誰もお前を哂ふ者はない　かうなつて見ると　今までのお前の鼻がどんなに可笑しかつたかわかるだらう。内供は鏡の中にある二つの顔の表情の差が直に自分と他人との間にある間隔そのものを見せつけてゐるやうな気がした(注14)

この草稿では、〈人なみになつた〉という言葉をめぐって、内供の安堵と〈今までのお前の鼻がどんなに可笑しかつたかわかるだらう〉という弟子の憐憫が対称されている。完成稿でも確認できるが、〈人なみ〉であることにこだわっている内供には、僧俗に対して指導的な立場にある高徳の僧というイメージが希薄である。しかし〈自分と他人との間にある間隔そのもの〉という言葉に注目すると、草稿段階では自分と隔絶した外部をしっかり意識できている内供の姿が読み取れるのである。一方完成稿では、そのような外部との間での緊張感を漂わせた意識は閉ざされてしまい、閉ざされた自己意識の中で鼻への妄執に囚われている内供像が描かれている。他者と結びつく回路を持ちえず、ひたすら自分の鼻という問題に拘泥する内供の、自閉して生きる姿がここに提出されている。

そしてこのような内供が直面することになるのが、池の尾の僧俗たちから向けられた哂いであった。池の尾の僧俗たちが哂ったことについては、語り手が以下のように注している。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいやうな気にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くやうな事になる。

いわゆる〈傍観者の利己主義〉と名づけられた、よく知られたくだりである。海老井英次は、〈〈鼻〉を人並みにしてしまったことは、彼の特殊性(オリジナリティ)の否定であり、内供の内供としての存在意義を否定したこと〉(注15)を池尾の僧俗に見抜かれたことが哂いの原因であると考えている。内供の内供としての存在意義

が鼻であったというのは、いささか言い過ぎの感があるが、内供が自らを損なってしまったという方向性は支持したい。

それというのもスティグマである長い鼻を備えた内供の姿こそが、外部である他者にとって内供の正統なイメージであると考えられるからである。その内供の特徴的な鼻が短くなったことは、内供が内供である属性の一つを失うことを意味しており、内供像を形成した特徴が失われたことで、鼻の長かったかつての内供の顔と短い鼻の今の内供の顔との間で見る者にイメージのズレが生じ、哂いが生まれるのである(注16)。この意味で内供が犯してしまった失策は、鼻の長い内供像を受け入れていた池の尾の僧俗との関係において、自分の長い鼻に違和感を抱く内供が、僧俗に認知されている自己像を考慮せず、一方的に自己像を改変したことで、内供自身が自分の「自己像」をめぐるミス・マッチを演出してしまったことにあるといえよう。

加えて、池の尾の僧俗たちから見た内供の社会的立場も勘案する必要がある。〈専念に当来の浄土を渇仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったから〉とあるように、内供の本分からするならば、自分の鼻のことよりも意を注がなければならない第一の事柄は信仰を中心とした生活である。しかし、普段は長い鼻を気にもとめない様子で行いすましていた内供が突然短くなった鼻で人々の前に現れた時、人々は内供が抱え込んでいた鼻への執着を目の当たりにし、僧侶としての職務もさることながら、長い鼻のこともしっかり気にしていた内供の真実の姿を知ることになる。それは石割透も指摘する〈鼻を短くしたことで、初めて内供が内部のコンプレックスを素直に曝したこと〉(注17)を意味するだろう。内道場供奉という地位にある人の、このような文字通りの「変貌」ぶりは、内供に対する池の尾の僧俗の評価を著しく低下させないわけにはいかない。〈人々が哂っていたのは、鼻そのものではなく、その鼻によって左右される内供の内面であり、コンプレックスを隠して演技しているその虚飾の人間性だったということになろう。〉(注18)という、内供の人格にまで踏み込んだ田中実のような批判的見解も当然出てくることになる。なぜならば、〈よい適応とは、スティグマのある者が[一方では]晴れやかに、しかも自意識を伴わずに、自己自身を基本的には常人と同じ人間として受け容れ、他方では常人が口先だけにしろそこで彼を常人同様に受け容れているとはいいにくい状況で自発的に控え目にすることを必要条件とするのである〉(注19)というゴッフマンの指摘を参照するならば、スティグマを持つ人間が守るべき控え目さを持たず鼻を〈人なみ〉に変えてしまった内供は、池の尾の僧俗への〈よい適応〉ではなく、悪い適応をしてしまったことになるからである。

さらに一章で述べたように、内供をめぐる〈同情のコンセンサス〉の存在も想起しなければなるまい。内供が鼻に執着する一方で、池尾の僧俗の間には内供をめぐる〈同情のコンセンサス〉が存したという指摘である。ここから浮かび上がってくるのは、内供が池の尾の僧俗への〈よい適応〉を無視した行動をとったことによるミスマッチの滑稽さもさることながら、そのような〈同情のコンセンサス〉の存在を理解せず独断的に行動する内供自身の他者に対する閉じられた意識や自己完結した世界の問題である。この意味で、鏡に向かって〈かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。〉と呟く内供の言葉こそは、自分の理想像にアイデンティフィケートしていく内供の意識を表しているというだけでなく、池の尾の僧俗の〈同情のコンセンサス〉に気づくことができず、自分と他者との間に結ばれている関係性を認知できない、自閉した内供の内面世界の限界を指し示す雄弁な指標であったといえるのである。

三

以上縷述してきた内供の新しい顔―短い鼻に基づく身体像とその自閉的世界の問題についての検討を踏まえ、最後に研究史上〈芥川論のアポリア〉(関口安義)(注20)とされる最後の場面について私見を述べてみたい。風で一晩のうちに葉を落とした早朝の寺内の〈明い〉風景が物語られた後に、以下の文章が続く。

内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた。

――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。

明らかなように、秋風の中に長い鼻をぶらつかせて〈――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。〉と自分に囁く内供の姿は、鏡を眺めながら〈かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。〉と満足そうにしている内供の姿と対称されている。この間に記述されたエピソードとしては、内供が僧俗につけつけと哂われるようになったことから次第に機嫌が悪くなり、〈内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた。〉という心情を内供が抱くようになったことであり、ここに〈鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた。〉という表現

を導く伏線はとこにも見当たらないことを確認しておきたい。つまり〈はればれした心もち〉とは、不意に内供を訪れる感懐なのである。

ところが寺内の風景の明かるさに照応するかのように、内供の〈はればれした〉心境が語られることから、この場面に内供にある「変化」を読み取る解釈が認められる。例えば宮坂覺は、〈ここで、内供は人生最大の危機を突破したのである。〉とし、〈彼は、外なるハンディが克服されても、それによって蝕まれた内なるハンディが克服されぬかぎり事態は変らぬことを悟った。内供にとって異形なものは、鼻ではなく、実は心の裡にあった。それに内供は気づいたのである。人間にとって外なるハンディなど、己れのアイデンティティが確立されてさえいれば、生活に翳りをおとさない〉。〈内供は、鼻治療という体験を通して名実ともに高徳の僧に変貌したということができよう。〉（注21）と述べている。清水孝純は、〈それが実の世界への還帰であることはいうまでもない。「黄金を敷いたやうに明い」庭、「まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる」朝の輝きは、いわば還帰の安堵なのである。長い鼻は再び、生気をとりもどしたかのごとく「五六寸あまりもぶら下つてゐる。」鼻は、内供にとって呪うべきものではなく、愛すべきものとして価値を顚倒している。／結末の「長い鼻をあけ方の風にぶらつかせながら」は、愛すべき長い鼻と内供の共棲の出発をあらわすものであろう。〉（注22）と述べる。近年でも高橋龍夫が、〈この自然と心情との審美的一体化は、唯一無二の美的瞬間を彼にもたらしている。それと同時に、内供の鼻が元通り長くなったことで、池の尾の者たちの「傍観者の利己主義」も溶解し、ここに内供と他者との関係性の恢復、とりわけ池の尾でも高僧としての、周囲との社会的調和が示唆されてくると思われる。〉（注23）と、池の尾の僧俗との関係が回復する調和的な結末を読み取っている。

いずれも内供の新しい顔―短い鼻に原因して表れた、周囲の人間関係との思わぬ不調和の解消や、内供自身の鼻への執着からの解放を読み取る論考である。しかし、物語の最初に語り手によって提示されたもう一つの問題である内供の〈自尊心の毀損の恢復〉という問題が、これらの論考で果たして十分解決されているのだろうか。内供の自己満足にもかかわらず結末が示しているのは、内供が企図した〈自尊心の毀損が回復〉された状態ではなく、内供の新しい顔―短い鼻に原因する池の尾の僧俗との軋轢が一見解消したように見えるというだけのことに過ぎない。しかも鼻が再び長くなった内供を見て、池の尾の僧俗たちが、〈同情のコンセンサス〉を再び示してくれるかどうかは疑問である。なぜなら、内供は鼻を気に病む自分のコンプレックスを自ら公にすることで威信を損なったばかりでなく、鼻の治療をした弟子を含む身近な僧たちからも反感を買うようにまでなってしまっているのだから。このように、予想される池の尾の僧俗の内供に対する評価の悪化を考慮すると、以後の内供と池の尾の僧俗の関係は、到底最初のようなレベルには回復しないと考えた方が良いだろう。つとに三好行雄が指摘しているように〈明らかに錯覚である。今日からはまた、長くなった鼻を内供は笑われねばならぬはずである。〉（注24）という事態は免れないばかりか、哂い以上の厳しい状況に内供は直面すると考えられるのである。

さらに言えば、内供が恐れている哂われることとは、鼻が短くなった新しい顔についてであり、本来有していた自分の長い鼻の問題、自分に備わる違和感のもたらす深刻な自己意識の分裂情況は解決されていない。一見対他関係の問題は解決されたように見えても、内供の対自的な問題は解決されず、しかも述べたように内供に対する池の尾の僧俗の態度は悪化が予想される。このように内供をめぐる三つの問題系の二つが宙吊りになったまま物語が決着するとすれば、これらの悟達・調和論的主張は「鼻」の最終場面に対する解釈として十分な説得力を持つとはいえないのではないだろうか。

一方、〈内供は鈍感ではあっても、痴呆ではない。むしろ彼が人々との関係で深く傷付き、人間というものを怖れ、敬虔な心持になったはずである。〉と述べる田中実は、以下のような〈中途半端と言うか、あまり自己認識のない男〉としての内供像を示していた。

内供は人々が相変わらず哂うことを熟知している。だが、鼻さえこのように長くなれば、もうそれほど人は哂わなくなることも、得難い体験のなかで身に付けてしまった。つまり、「かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。」と内供がつぶやくその意味は、「単に誰も哂わないと錯覚」しているというのでも、高徳の僧になったというのでもなく、昨日までのようにもう「つけつけ」と露骨に哂うものはいないに違いない、ということであると私は考える。事態は“ほどほど”“そこそこ”のところに落ち着いたのである。（注25）

事態の〈“ほどほど”“そこそこ”〉の決着を読む指摘にも、池の尾の僧俗の内供に対する感情の悪化への考慮が不十分である。〈自己認識のない男〉という田中の指摘にもあるように、内供の自己意識は他者を介さない中での自己―自己コミュニケーションの産物であった。そのような内供が、人間関係の中で明

確な自己像をもてるはずがなく、そのことと内供自身が〈――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。〉と考えてしまうような、人間心理において明を欠いていたことは通底するといって良い。内供が、〈傍観者の利己主義〉についても明を欠いていたという語り手の評を参照すれば、結末部で内供が想像するような内供を哂う他者像の解消などという事態も、都合のよい夢想に過ぎないことが見えてくる。そもそもこのような夢想を抱くことが内供において可能なのは、内供が依然として他者に対して閉ざされた〈わたし〉の世界を保有し続けていることの証拠なのである。結末部で内供は、自分が望む哂わない他者像を描き出し、他者との融和した状況を夢想する。しかし内供自身の在り方が生み出した池の尾の僧俗との隔絶状況を考慮する時、内供の夢想する他者像と現実の僧俗が示すであろう態度との落差には目を覆うばかりのものがある。それゆえに秋の風の吹く明るい寺内に向かって立つ内供の姿は愚かしく、また哀切さも一入に感じられるのである。

四

内供をめぐる問題系とは、内供の対自的・対他者的問題と、他者から捉えられる内供像の問題であった。自分の鼻に違和感を抱く対自的問題を抱える内供は、長大な鼻を人並みの鼻のイメージに一致させることでその問題を解決しようとした。この意味で内供は転倒しているようではあるが、現在の我われも共通して抱えている問題を先取りした人間像なのである。

内供の問題はむしろ対他者的な姿勢にうかがえる。すなわち内供は池の尾の僧俗と自分の関係とその中で捉えられている自分のイメージを顧慮することなく、自分の鼻に物理的加療を施したのである。その結果内供が新しい顔―短い鼻を獲得できたと考えたにもかかわらず、周囲が哂う事態を招いてしまう。内供が損なったのは、今まで共有されていた長い鼻を持つ内供像というレベルにとどまらない。内供に対する池の尾の僧俗の〈同情のコンセンサス〉であり、さらにはその鼻を気にかけることなく仏道に専心していたはずの尊敬すべき内供像であった。つまり池の尾の僧俗の、内供に対する敬意と信頼である。内供の喪失したものは、獲得した新しい顔―短い鼻に比べようもなく、取り返しのつかない大きなものであったといえるだろう。

以上の考察から導かれる内供像とは、長大な鼻を中心化した自分の世界観でのみ自分を捉え、他者の全体像も鼻を基準に断片化して認識してしまう内供像である。内供の自己意識は、自分が他者との関係の中で生きていることを認識することができないのであり、この意味で「鼻」を通して浮かび上がってくるのは内供の自尊心の問題というよりも、他者の世界から隔絶し自閉した内供という主体の問題である。内供の世界に他者は存在せず、他者と自分の関係性が見えていない内供にとって自分とは、鼻に囚われた自己意識の暗闇に閉じ込められた存在であることはいうまでもない。同時期のテクストである「羅生門」と「鼻」のラストシーンは、一見明暗の対照を示しているように見えるが、その内実は、主人公達がいずれも自己の自閉したエゴイズムに閉ざされている点で共通しているのである。

「鼻」執筆時を回顧した芥川の、「自分は半年ばかり前から悪くこだはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短編を書いた」（「あの頃の自分の事（削除分）」（注26）という言葉はよく知られている。芥川が「羅生門」や「鼻」を書いていた時に体験していたとされる恋愛問題から抽出された、自己と周囲のエゴイズムをめぐる問題は、当人の希望とは反対に〈二つの短編〉に如実に反映されている。「鼻」にひきつけていうと、芥川は内供を通してスティグマを負った身体―鼻に規定された自己意識の解放などを描いたのではなく、逆に身体―鼻に規定された自己意識にとらわれつづけ、それを解決しようとして果たせない救いようのない姿を見つめていたのである。

このような、何らかのスティグマを負い閉ざされた自己の世界に生きる内供像は、決して特殊な人間像ではない。生きる過程において、何らかの傷や刻印を負わぬものはいないのであり、その意味で我われの誰もが内供像に自分の姿を見出さないではおれない。そしてその傷に囚われ苦悩し、他者との関係を見失いがちになることについても。フローベールに倣っていうなら、禅智内供とは我われのことなのだ。

注1　『近代文学注釈叢書14芥川龍之介Ⅰ』有精堂、一九九〇年八月一〇日、二二六頁。

2　『近代文学　弱性の形象』翰林書房、一九九九年二月二八日、一六一頁。

3　『今昔物語集五　新日本古典文学大系　三七』一九九六年一月三〇日、岩波書店、二三〇頁。

4　『スティグマの社会学』二〇〇一年四月六日、せりか書房、一六頁。

5　注4に同じ。一八、一九頁。
6　「芥川龍之介『鼻』にみる潜在的〈他者性〉の考察」「論樹」一〇号、平成八年九月。
7　「芥川龍之介『鼻』論――コミュニケートの願い――」「論究日本文学」七一、一九九九年。
8　蓼沼正美は、〈彼にとっての鼻は、ただそれを長い（＝不自然）と認識させるための装置、つまりは自他の中に幻視された〈自然な〉鼻との関係によってのみ、生かされていたのである。（中略）要するに、内供の顔に鼻（＝身体）はなかったのである。〉と指摘する（「『鼻』・身体との出会い」「国語国文研究」一一五、二〇〇〇年）。鼻を身体と捉える論者とは異なる見解だが、内供の身体と鼻の関係を検討した論考であり、併せて参照されたい。
9　「『鼻』『芋粥』にみるグロテスク感覚の行方」『作品論芥川龍之介』一九九〇年一二月一二日、双文社出版、四九、五〇、五二頁。
10.　『顔の現象学』一九九八年一一月一〇日、講談社学術文庫、七〇頁。
11.　『芥川龍之介論攷』昭和六三年二月二五日、桜楓社、一一一頁。
12.　注9に同じ。五六頁。
13.　注10.に同じ。二二、二三頁。
14.　「『鼻』草稿」『芥川龍之介全集』第二一巻、一九九七年一一月一七日、岩波書店、一六〇頁。
15.　注11.に同じ、一一一頁、一一二頁。
16.　ショーペンハウアーは、〈笑いが生じるのはいつでも、ある概念と、なんらかの点でこの概念を通じて考えられていた実在の客観との間に、とつぜんに不一致が知覚されるためにほかならず、笑いそのものがまさにこの不一致の表現なのである。〉と述べている（「意志と表象としての世界」『世界の名著45』一九九九年二月二五日、中央公論新社、一九二頁）。
17.　『芥川龍之介―初期作品の展開』一九八五年二月一日、有精堂、九五頁。
18.　「芥川文学研究ノート③『鼻』と『龍』」「都留文科大・研究紀要」四〇、一九九四年三月。友田悦生も、〈むしろその治療によって、内供自身が自らの鼻を笑われるべきものとみなしていたことが明るみに出てしまう。そうなると、正常化したはずの内供の鼻は、今度は、鼻に対する内供の屈折した意識の標識として、別の意味で滑稽視される。〉と指摘する（「『鼻』のアレゴリー」「日本近代文学」五一集、一九九四年一〇月一五日）。
19.　注4に同じ、二〇二、二〇三頁。
20.　『芥川龍之介　実像と虚像』一九八八年一一月一五日、洋々社、八〇頁。
21　『Spirits芥川龍之介』一九八七年四月一〇日、有精堂、九〇、九一頁。
22　注9、五八頁。
23　「『鼻』――調和への志向――」「解釈と鑑賞」第六四巻第一一号、一九九九年一一月
24　『芥川龍之介論』昭和五一年九月三〇日、筑摩書房、七七頁。
25　注18.に同じ。
26　『芥川龍之介全集』第四巻、一九九六年二月八日、岩波書店、一四六頁。

要旨

芥川龍之介「鼻」における禅智内供は、長大な鼻を中心化した自分の世界観でのみ自分を捉え、他者の全体像も鼻を基準に断片化して認識してしまう。内供は、自分が他者との関係の中で生きていることが認識できないのであり、この意味で「鼻」を通して浮かび上がってくるのは、内供の自尊心の問題というよりも、他者の世界から隔絶し自閉した内供という主体の問題である。いうなれば内供の世界に他者は存在せず、したがって他者と自分の関係性が見えていない内供とは、鼻に囚われた自己意識の暗闇に閉じ込められた存在なのである。

keywords　スティグマ，身体

岡山大学教育学部国語教育講座　七〇〇―八五三〇　岡山市津島中三―一―一

A Study on Ryunosuke AKUTAGAWA's "Hana"

Takumi KIMURA; Department of Japanese Language Education, Faculty of Education; Okayama University, Tsushima-naka, Okayama 700-8530